

中国湖南省トン族の民家と集住形態に関する研究

土田 充義*・晴永 知之*・米森 義辰**・柳

肅***

A Study on Dong tribe's rural houses and living systems of Hunan in China

Mitsuyoshi TSUCHIDA, Tomoyuki HARUNAGA, Yoshitatu YONEMORI and Su LIU

The Dazhai Village is located in the southwest of the province of Hunan in China. It is the village of the Dong tribe. This tribe is one of the minorities in China. The purpose of this report is to clarify features of floor plans and structures of rural houses and living systems in this village.

From the combinations of floor plans and forms of roofs, the main house-Ⅲ type is the most common type in this village. This type is a rural house where the tangwu is an important space and has the upper front roof, the lower front roof, the upper back roof and the lower back roof. And one of features of rural houses is that they have flexible walls unrelated to structures.

Concerning structures of rural houses in this village, we can show the transition of structures. In some rural houses columns are laid out regularly. In other rural houses fewer columns are laid out. Basically the latter type is newer than the former.

In this village there is an intimate relationship between the living system and clans. The most important clan is the Liang family. Especially the Liang family where the beginning of the name is Xi is important. And this village is expanding to lower reaches from upper reaches and from low ground to high ground.

Dong tribe, Hunan in China, Flexible wall, Transition of structures, Living systems

1. 湖南省民家の調査と研究目的

湖南大学建築系と鹿児島大学工学部建築学科建築史研究室が共同研究を平成6年7月に開始し、平成6年度は南岳鎮の町家調査^{注1}、平成7年度は岳陽県張谷英村の民家調査^{注2}、平成8年度は永順県の土家族民家調査^{注3}を行い、これらをまとめて、湖南省民家の共同研究中間報告書を作成し、平成9年5月2日稲盛会館で報告会を開催した。その後平成9年度は鳳凰県の苗族民家の調査^{注4}、平成10年度は新晃県のトン族民家の調査^{注5}を行った。平成11年度は江華県の瑶族民家の調査をする計画である。今回の研究報告は平成10年9月18日から9月30日まで13日間の調査結果を基にしている。

湖南大学から助教授柳肅先生（鹿児島大学博士後期課程2年生）以下5名、鹿児島大学は6名、それに通訳と案内役各1名で合計13名での実測調査であった。

研究目的は3点あって、1点はトン族民家の板敷の使い方を明確にすることであり、もう1点は骨組に用いた貫に注目することであった。トン族民家は柱間に貫を通し、その貫の上に束を立てて、柱を除去する。日本の貫と異なり、貫を柱間の連結だけではなく、指物の如く、束を立てうる強度を貫に持たせていた。この貫を中心とした骨組を明らかにしたいことである。最後の1点は民家が集まることによって、独特の集住形態が成立する。そこには法則性とか秩序があると推定して、それを捉えることであった。

したがって本論では民家の平面形式、骨組の構成、それに民家の集住形態をとりあげた。

2. トン族の住居

2-1. 住居の特徴

トン族の住居は主に堂屋（tangwu）を中心として、この左右と背後に寝室（woshi）、囲炉裏部屋（qijushi）、竈つき厨房（chufang）、穀物置場（gucang）、物置（cangkū）が設けられている（Fig. 2-1）。

中央の堂屋は家族全員の共有空間で、祖先をまつる神棚（Fig. 2-3. 7. 11）があり、住居の中で特に重要な室

平成11年5月31日受理

*建築学科

**博士前期課程建築学専攻

***博士後期課程システム情報工学専攻

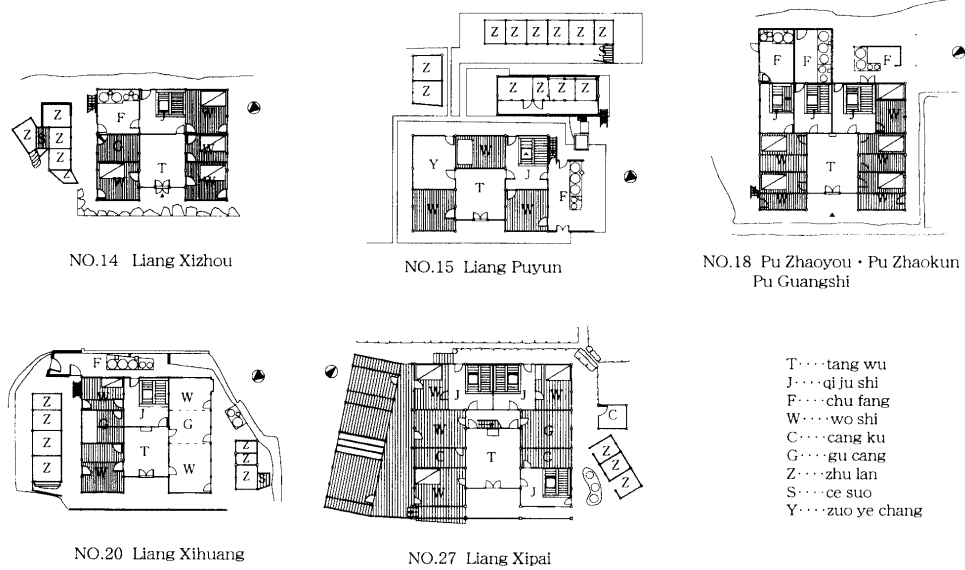


Fig. 2-1 Floor plan



Fig. 2-2 Liang Xizhou



Fig. 2-3 Liang Xizhou

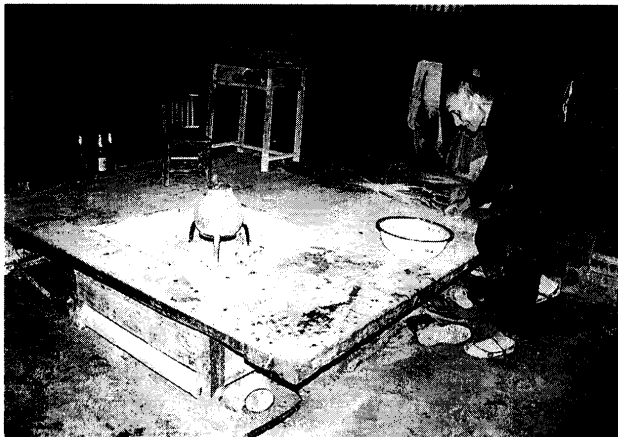


Fig. 2-4 Liang Puyun

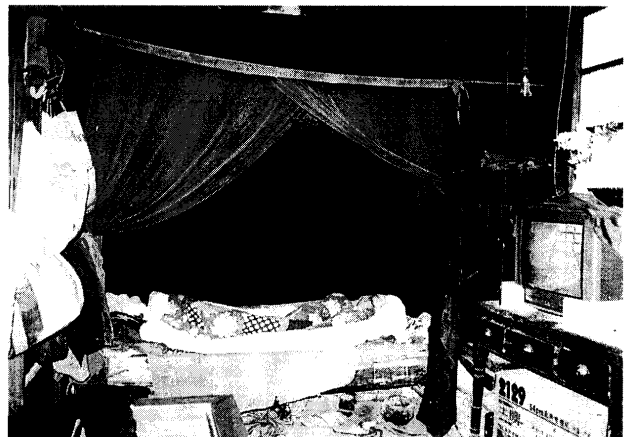


Fig. 2-5 Liang Puyun

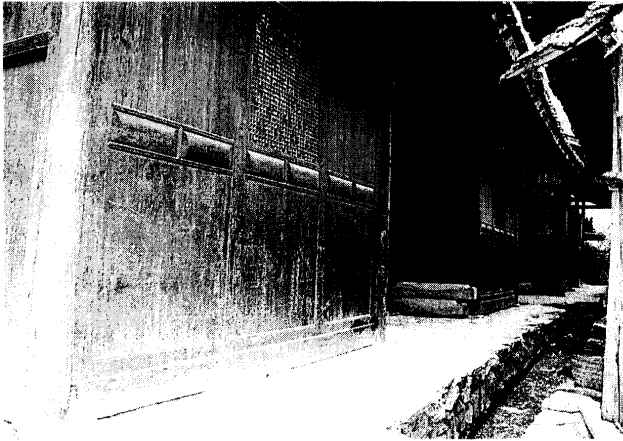


Fig. 2-6 Pu Zhaoyou·Pu Zhaokun·Pu Guangshi

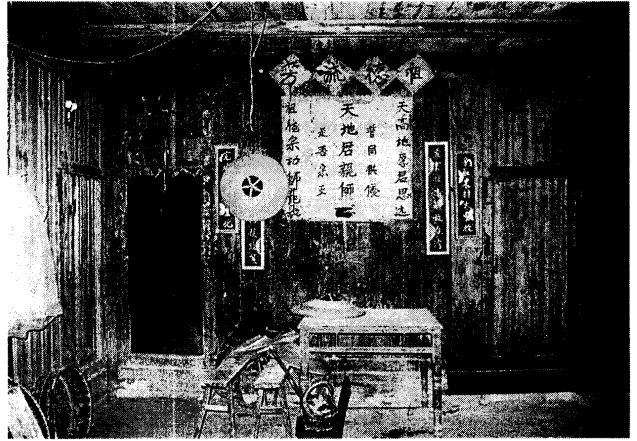


Fig. 2-7 Pu Zhaoyou·Pu Zhaokun·Pu Guangshi



Fig. 2-8 Liang Xihuang

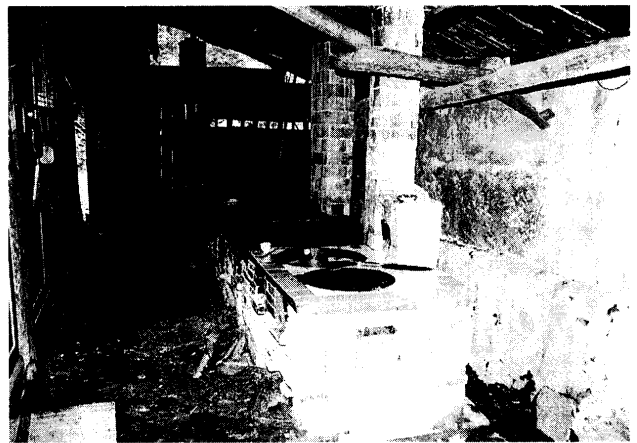


Fig. 2-9 Liang Xihuang

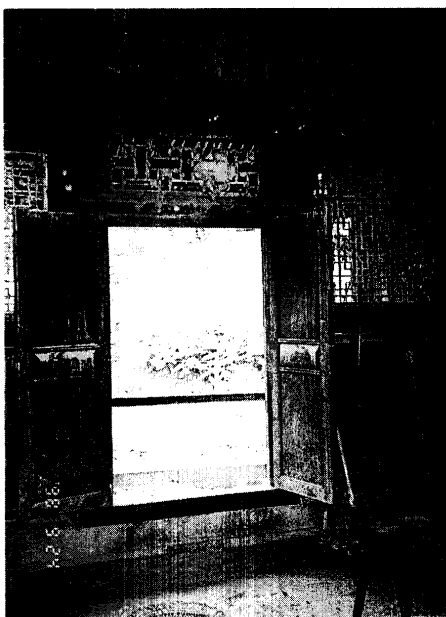


Fig. 2-10 Liang Xipai



Fig. 2-11 Liang Xipai

となっている。主に接客，作業，儀式の場として使用される (Fig. 2-10)。新晃県トン族の住居で特に特徴的なのは囲炉裏部屋の囲炉裏である。これは土間の上に高床となった囲炉裏を設けるもので，どの住居にも類似した高床の囲炉裏が設けられている (Fig. 2-4)。この囲炉裏は冬の採暖と調理用のために使用される。

寝室は板敷きで，その上にベッドを置いて就寝している (Fig. 2-5)。この寝室は堂屋の両端に設けられる場合が多い。トン族で使われている板敷きは日本の板敷きとは異なり，土足で上がり座るときには小さな椅子を用いるので，板を張ってはいないが土間と同じ使われ方である。竈つき厨房 (Fig. 2-9) はどの住居にも設けられており，住居内に設ける場合と屋外に設ける場合がある。

家畜小屋 (zhulan) と便所 (cesuo) は主屋から離れて別棟となっており，住居の左右や背後に設けられている (Fig. 2-8)。

2-2. 住居平面と屋根形状の分類

新晃県トン族の住居は明らかに住居平面，屋根ともに三つの型に分類できる。住居平面については，ほとんどの住居が堂屋を中心に各室が構成されているが，数個の住居に，この型ではないものがみうけられる。

そこで住居平面を下の三つの型に分類してみる (Fig. 2-12参照)。

主 屋 型……堂屋を中心として各室が構成されている (二階は物置として使われる)

土 間 型……一階は土間で竈を持つが主として物置として使われ，二階に寝室がある

付属屋型……一階を居室として使用するが，堂屋を中心として各室が構成されていない

また，屋根形状も三つの型 (Ⅰ型，Ⅱ型，Ⅲ型) に分類した (Fig. 2-12)。

その結果を表に示す (Table 2-1)。

この結果から住居平面だけに着目してみると，主屋型が最も多く31棟 (91.2%)，土間型が2棟 (5.9%)，付属屋型は1棟 (2.9%) となっており，圧倒的に主屋型が多いことがわかる。次に屋根形状だけに着目してみると，Ⅲ型が最も多く20棟 (58.8%)，Ⅱ型が7棟 (20.6%)，Ⅰ型が7棟 (20.6%) となっており，半数以上はⅢ型であることがわかる。

年代に着目すると1970年代まではⅡ型とⅢ型が主流であったが，1980年以降になるとⅠ型の形式を取り入れはじめていくことがわかる。

次に住居平面と屋根形状の組合せに着目すると，五つの型に分けられる (Table 2-2)。最も多い型は，主屋・Ⅲ型 (20棟) で全体の58.8%となっていた。

このような結果から新晃県トン族の住居平面と屋根形状の一般型は，主屋・Ⅲ型であると言えそうである。

2-3. 間仕切り

先に述べたように新晃県トン族の住居の典型は主屋・Ⅲ型であるといえる。しかし，主屋・Ⅲ型の中にも間仕切りの使い方に注目すべき特徴がある。一般的に間仕切りは柱真真に設けられるが，一部に柱真真ではない部分に間仕切りが設けられているからである (Fig. 2-13参照)。

そこで，主屋・Ⅲ型の19棟 (1棟は壁がまったく無いため除く) の柱真真の間仕切りと柱真真ではない部分の間仕切り (以下，否柱真とする) について分析を行った (Table 2-3)。ここで堂屋の間仕切りは必ず柱真真となっており，堂屋の左右と背後だけに否柱真の間仕切りがみ

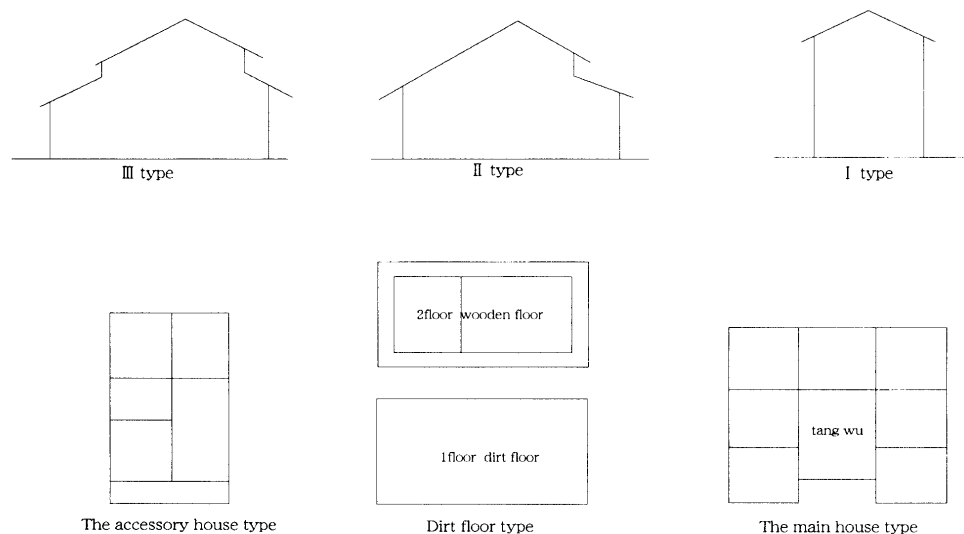


Fig. 2-12 Floor type and Roof shape type

Table. 2-1 Floor type and Roof shape type

No	The name of the house	The age of the house	Floor type	Roof shape type
21	Liang Xiyuan	1850	The main house	Ⅱ
24	Liang Xichun	1898	The main house	Ⅲ
33	Yang Zhangliu	1912	The main house	Ⅲ
30	Yang Qichun	1920	The main house	Ⅲ
13	Liang Xijun · Liang Xihuang · Liang Xiyue · Liang Xihong	1950' s	Dirt floor type	I
18	Pu Zhaoyou · Pu Zhaokun · Pu Guangshi	1950' s	The main house	Ⅲ
15	Liang Puyun	1951	The main house	Ⅲ
22	Liang Xiwei · Liang Xichun	1954	The main house	Ⅱ
5	Liang Yuanyang	1960	The main house	Ⅲ
14	Liang Xizhou	1960	The main house	Ⅲ
2	Liang Xihan	1960' s	The main house	Ⅱ
12	Liang Xijun · Liang Xihuang · Liang Xiyue · Liang Xihong	1960' s	The main house	Ⅲ
16	Zeng Jixun · Zeng Jiwen	1962	The main house	Ⅲ
19	Wu Bibao · Wu Bishi · Wu Biqing	1962	The main house	Ⅲ
28	Yang Xuxiang · Zeng Jixun · Zeng Jiwen	1962	The main house	Ⅲ
7	Zeng Jizheng	1965	The main house	Ⅲ
9	Liang Yuanxi	1968	The main house	Ⅱ
6	Zeng Renli	1978	The main house	Ⅲ
17	Liang Xipei	1982	The main house	Ⅱ
1	Liang Yuanming	1983-1984	The main house	I
3	Liang Xifeng	1983	The main house	I
4	Liang Yuandong	1983	The main house	Ⅲ
8	Yang Yuzhen	1983	The main house	I
10	Liang Yuanquan	1983	The main house	Ⅱ
20	Liang Xihuang	1983	The main house	Ⅲ
23	Liang Xiwei	1983	Dirt floor type	I
26	Liang Xixie	1983	The main house	Ⅲ
29	Liang Xihan	1983	The main house	Ⅲ
25	Wu Bijun · Wu Bihai	1987	The main house	I
25'	Wu Bijun · Wu Bihai	1987	The accessory house	I
11	Liang Yuanyuan	1988	The main house	Ⅱ
27	Liang Xipai	Uncertain	The main house	Ⅲ
31	Yao Yuanfu	Uncertain	The main house	Ⅲ
32	Yao Yuankai	Uncertain	The main house	Ⅲ

Table. 2-2 The number of house and The ratio

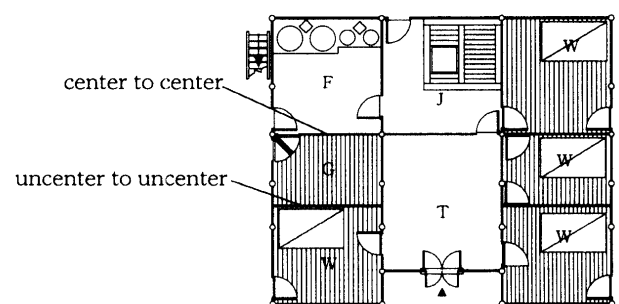
Type	The number of house	The ratio (%)
The main house · Ⅲ Type	20	58.8
The main house · Ⅱ Type	7	20.6
The main house · I Type	4	11.8
Dirt floor type · I Type	2	5.9
The accessory house · I Type	1	2.9
Total	34	100

られたことから堂屋の間仕切りは除いて分析を行った。

その結果、否柱真に間仕切りのある住居は12棟(63.2%)あった。また、否柱真の間仕切り数は全体の間仕切り数の31.5%にもなっていた。これは三割以上の間仕切りが力を支える構造材としてではなく、室を間仕切るためだけに設けられているということになる。

また、否柱真の間仕切りの位置は背後が14.4%、左右が17.1%と若干ではあるが左右の方が多いことがわかる。

間仕切りと室数に着目すると、柱真真の間仕切りだけで構成された住居の室数が平均6室であるのに対して、



NO.14 Liang Xizhou

Fig. 2-13 Explanation of Partition wall

否柱真に間仕切りのある住居の室数は8.92室とかなり多くなっていることがわかる。このことから否柱真の間仕切りが造られた理由として、住居に居住する人数が多いため、部屋数を多くする必要から、部屋割の制限を無くして各住居で用途に合わせて自由に間仕切ったのではな

Table. 2-3 Partition wall and The number of rooms

No	The name of the house	The age of the house	Floor type	Roof shape type	uncenter to uncenter (the back)	uncenter to uncenter (the side)	uncenter to uncenter (Total)	center to center	The number of rooms
24	Liang Xichun	1898	The main house	Ⅲ	0	2	2	2	6
33	Yang Zhangliu	1912	The main house	Ⅲ	1	1	2	5	13
30	Yang Qichun	1920	The main house	Ⅲ	0	1	1	3	6
18	Pu Zhaoyou · Pu Zhaokun · Pu Guangshi	1950	The main house	Ⅲ	4	2	6	4	11
15	Liang Puyun	1951	The main house	Ⅲ	0	0	0	4	6
5	Liang Yuanyang	1960	The main house	Ⅲ	1	2	3	6	11
14	Liang Xizhou	1960	The main house	Ⅲ	0	2	2	4	8
12	Liang Xijun · Liang Xihuang Liang Xiyue · Liang Xihong	1960's	The main house	Ⅲ	3	2	5	2	9
16	Zeng Jixun · Zeng Jiwen	1962	The main house	Ⅲ	—	—	—	—	—
19	Wu Bibao · Wu Bishi · Wu Biqing	1962	The main house	Ⅲ	1	0	1	2	5
28	Yang Xuxiang · Zeng Jixun · Zeng Jiwen	1962	The main house	Ⅲ	2	3	5	6	11
7	Zeng Jizheng	1965	The main house	Ⅲ	0	0	0	4	6
6	Zeng Renli	1978	The main house	Ⅲ	0	0	0	4	6
4	Liang Yuandong	1983	The main house	Ⅲ	0	0	0	4	7
20	Liang Xihuang	1983	The main house	Ⅲ	0	0	0	4	6
26	Liang Xixie	1983	The main house	Ⅲ	1	2	3	2	7
29	Liang Xihan	1983	The main house	Ⅲ	0	2	2	4	8
27	Liang Xipai	Uncertain	The main house	Ⅲ	3	0	3	7	12
31	Yao Yuanfu	Uncertain	The main house	Ⅲ	0	0	0	4	6
32	Yao Yuankai	Uncertain	The main house	Ⅲ	0	0	0	5	5
	Total				16	19	35	76	149

いかと考えられる。

このように新晃県トン族は自由に間仕切りを設けるという特徴を持っていることがわかる。

3. トン族民家の骨組

3-1. 骨組の特徴

トン族民家の骨組に共通する点は棟木を支える柱（それを仮に中柱と称す）が必ずあるということと上屋と下屋で構成されているということである（Fig. 3-1参照）。それに貫を柱間に通し、その上に束を立て母屋を支え、小屋裏を収納庫にするために広い空間を確保していることである。時には客人が宿泊できる部屋を造る。斜面に立てるために、小屋裏の有効利用も当然であろう。その上屋と下屋との間を正面は少し広く（当地では犬が通れるくらいにするとのこと）、背面は少し狭く（当地では猫が通れるくらいにするとのこと）している。それは多くの民家が中柱の正面前方と背面後方で屋根の長さが異なり、背面後方の方が長い。そのために背面においては上屋と下屋の間を狭くせざるをえない理由もある。下屋との間隔から風が入り、穀物の乾燥には適している。

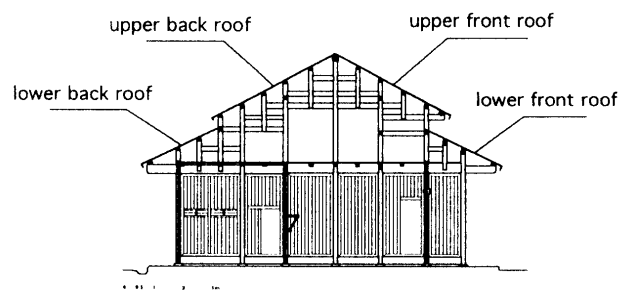


Fig. 3-1 The structure of rural house of Dong tribe

簡単に骨組の特徴をまとめると次の通りである。

1. 棟木を支える中柱が必ずある。
2. 上屋と下屋の構成で両者間に間隔がある。
3. 貫に束を立てて小屋裏を確保している。

3-2. 骨組の発展過程

トン族民家の断面は16棟しか実測できなかった。その16棟の骨組を広い空間を完成させる方向、これを発展と考えて並べてみた（Fig. 3-2参照）。その並べるにあたって、2つの方法を用いた。一つは上屋と下屋の屋根構成をしていながら、上屋柱を中柱へ半間（柱間に入れた束と柱の間を示す）、1間、1間半、2間と近づけることでまず分類した。もちろん半間が中柱へ近づかない場合、つまり上屋柱が移動せずに上屋と下屋の区分が明確な場合を第1グループとした。上屋柱が半間だけ中柱へ近づく場合を第2グループ、1間を第3グループ、1間半を第4グループ、2間を第5グループに分けた。そのグループに属す民家の番号を示すと次の通りである。

第1グループ 3・10・13・16の民家

第2グループ 1・2・4・12・15の民家

第3グループ 6・7の民家

第4グループ 8・14の民家

第5グループ 5・9・11の民家

更にそれぞれのグループに属す民家を、中柱から正面前方と背面後方と同じ柱間（A）の場合、半間（B）、1間（C）、1間半（D）それぞれ長い場合とで分けてみた。それが二つ目の方法である。この方法で各グループに属す民家を更に分けると次の通りである。

第1グループ 3・10・13・16の民家

のうち3の民家は前後同じ柱間（A）であり、16の民家は半間後方（B）に長くなり、10と13の民家は1間後

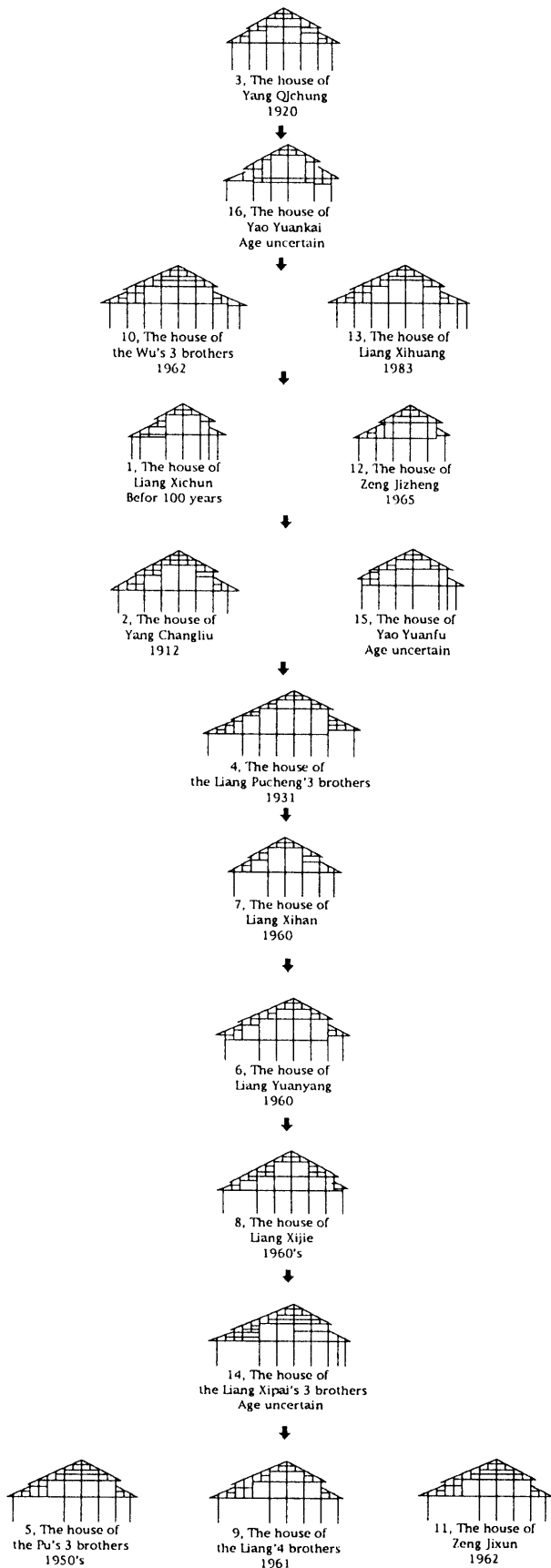


Fig. 3-2 The transition of structure

方 (C) に長くなる。したがって 3 → 16 → 10・13 の順に並べることができる。

第2グループ 1・2・4・12・15の民家のうち

1・12の民家は前後同じ柱間, 2・15の民家は半間後方 (B) であり, 4の民家は1間半 (D) 後方が長い。したがって 1・12 → 2・15 → 4 の順になる。

第3グループ 6・7の民家のうち

7の民家は (A) であり, 6の民家は (C) に属す。したがって 7 → 6 の順になる。

第4グループ 8・14の民家について

8の民家は (C) であり, 14の民家は (D) である。したがって 8 → 14の順の発展過程と考える。

第5グループ 5・9・11の民家について

3棟共に後方の屋根は1間 (C) 長く, 骨組は全く同じである。

この過程は背後の柱を抜いて, いかに広い空間を確保しようとしたかの努力の現れといえるであろう (Fig. 3-2参照)。

中柱から後方の空間で各グループごとに最大のスパン (梁間) が何間かを見ると, 第1グループは1間, 第2グループは1間半から2間, 第3グループは2間, 第4グループは2間から2間半, 第5グループは3間である。このことから次のことを指摘できる。

1. 柱間2間にするには第2・第3・第4グループの方法があり, 多様な方法がある。

2. 柱間1間にするには第1グループの方法しかない。

3. 柱間3間にするには第5グループの方法しかない。

これらの分類は16棟の民家を対象にしているにすぎないので, 他の骨組もあるかもしれない。しかし大局的には把握できたものと考えうる。

3-3. 建設年代との照合

第1グループから第5グループにトン族民家の骨組が発展し, それが建設年代と一致すれば, 時の流れと発展形態が符合することになる。しかしなかなかそうはいかない。100年前の建設の1の民家は第2グループである。建設年代が分かる民家で最も新しい民家は1983年建設で, それは第1グループに属す。したがって第1グループから第2グループへ発展するとは必ずしもいえないことになる。しかし建設年代と発展過程が一致しないのは民家の建設にあたって常にその時の最新の技術を用いて建設するとは限らないからである。また建設資金, 家族構成, 敷地の大きさ, 大工の技術等が関係すると考えられるからである。全グループが入り乱れている訳でもない。第3グループから第4・第5グループまでは建設年代に逆転することはない。第1グループや第2グループに多いのは, 比較的単純な形式の骨組である。そのため常に建

設されやすいのかもしれない。古い時代の比較的単純な形式と新しい時代の単純な形式との間には相違があるはずである。それは柱真々寸法を比較することでもっと深められるかもしれない。それは今後の課題としたい。

16棟の民家のうち3棟は年代不明であったが、2つの視点で分類すると16の民家が最も古く、次が15の民家、比較的新しい民家が14であるということも指摘しうる。したがって骨組の発展過程の分類は編年指標ともなりうる。

4. 集住について

4-1. 集落構成

新晃トン族自治県中寨鎮大寨村に点在する集落の中で重点的に実測調査を行った集落は、溪谷の斜面に展開し、ほぼ北に面していた (Fig. 4-1, 以下 Fig. 4-1を参照)。現在の基幹道路はこの集落の北側、家屋27・28の後方の

高台にある。この基幹道路から集落までは、まず道を下り、家屋27・28が建っている横を通り、更に斜面を降り、この周辺唯一の連続アーチの石橋を渡る。このあたりは田畑で最も低い土地で、丁度谷間になり、集落に面した丘には墓石群がある。この墓石銘に梁氏の名前が記されているが、墓石群は中寨鎮計寨村の楊氏宗族の墓であり、この集落とは無関係であるという。墓石群と集落の間に小さな河が流れており、集落のある岸は三本の木板を渡した橋がある。この3箇所が集落への入口であろう。このようにこの集落では、川を一度に渡ってアクセスせず、小さな川を計二度渡ってアクセスしなくてはならない。

この溪谷では、墓石群のある丘は川から畑、道、そして緩やかな両側の斜面で構成されており、集落は斜面上の整地された敷地に家屋等の建物が下から上に段々に立地している (Fig. 4-2)。

集落前面の小さな川は西側から東側へ流れており、家

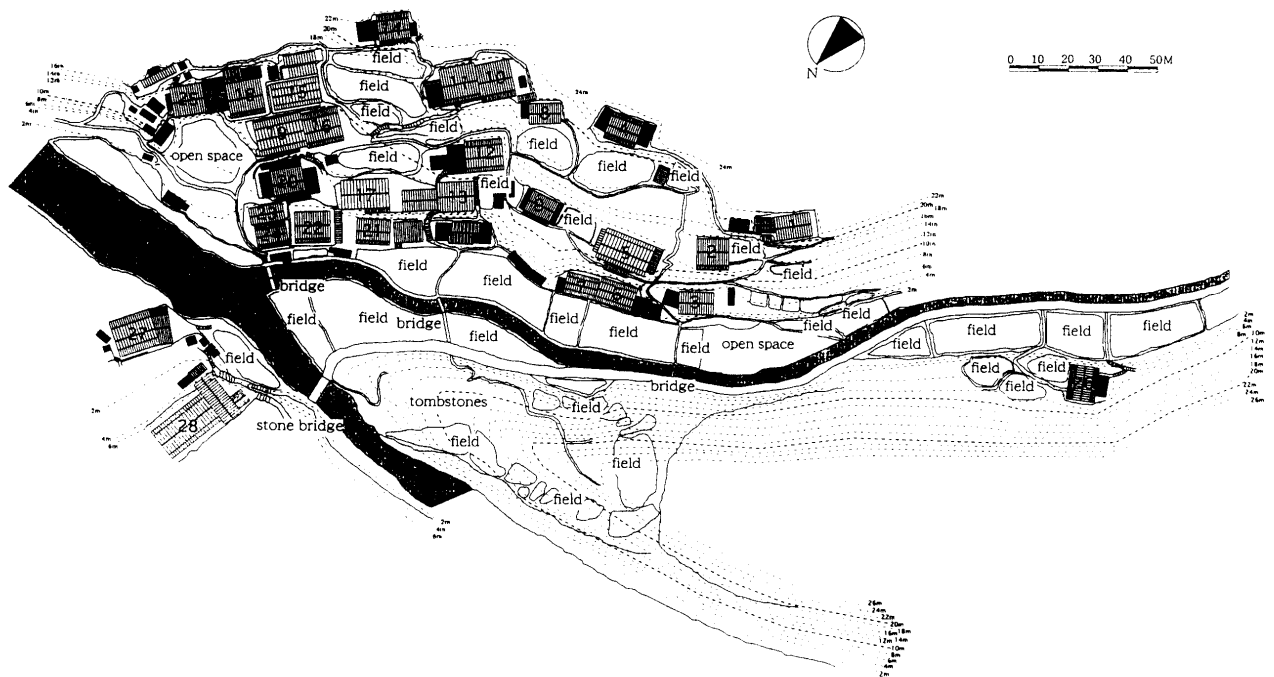


Fig. 4-1 Site Plan of Dazhai Village

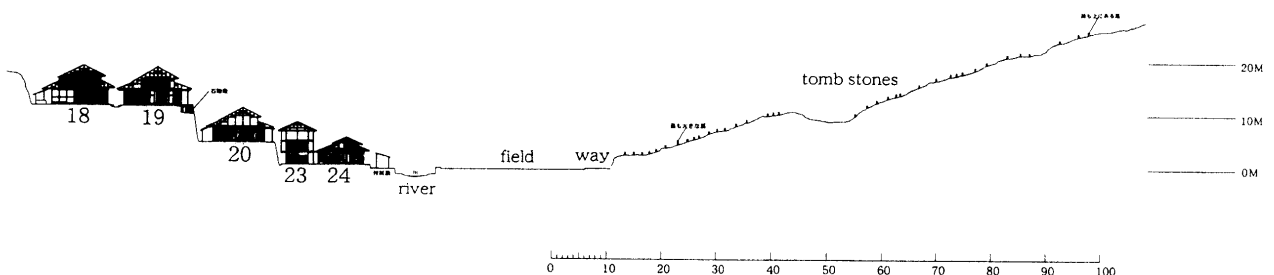


Fig. 4-2 Section of Dazhai Village

屋24の前方で大きな川と合流して一本の川になって更に西から東へ流れている。

4-2. 姓による家屋分布

一般にトン族では姓名からおよその宗族関係がわかる。例えば家屋12には四兄弟が居住している。梁系鈞 Liang Xijun (長男)、梁系晃 Liang Xihuang (二男)、梁系躍 Liang Xiyue (三男)、梁系洪 Liang Xihong (四男)の四兄弟である。この四兄弟は当然梁家であることは分かるが、“系 Xi” という文字も共有している。このように名前の最初の一文字を共有することは、強い結び付きを示す^{21.5}。

小さな川の南側の丘に展開する26棟の家屋では、“梁 Liang” という姓が18棟 (69.2%)、“曾 Zeng” という姓が3棟 (11.5%)、“呉 Wu” という姓が3棟 (11.5%)、“楊 Yang” という姓が1棟 (3.8%)、“蒲 Pu” という姓が1棟 (3.8%)である (Table 2-1, 以下 Table 2-1 参照)。“梁 Liang” という姓の中でも、“梁系 Liang Xi” 関連の姓名は11棟 (全体の42.3%)、“梁源 Liang Yuan” 関連の姓名は6棟 (全体の23.1%)、“梁普 Liang Pu” 関連の姓名は1棟 (全体の3.8%)である。これらのことから、この集落では“梁 Liang” という姓が多い。なかでも“梁系 Liang Xi” の2文字を使う姓名が全体の四割強を示し、“梁系 Liang Xi” を主体とした梁家の集落といえるだろう。

ここで、この集落内における姓等による家屋分布を示す (Fig. 4-3, 以下 Fig. 4-3を参照)。“梁系 Liang Xi” 関連の家屋は家屋14の1棟以外は全て北側、即ち川寄りに立地している。特に集落のほぼ東半分の川側の部分には“梁系 Liang Xi” 関連の家屋が群を成している。そしてその後方に他の姓の家屋が立地している。集落のほぼ東半分では墓石群から渡る際に二本の橋があるが、当然これらの橋は“梁系 Liang Xi” 関連の家屋の前方に架けられている。ほぼ西側半分では“梁系 Liang Xi” 関連の家屋以外に、“曾 Zeng” という姓の家屋 (家屋6・7) が川寄りに立地しているが、墓石群から渡る際のもう一本の橋は“梁系 Liang Xi” 関連の家屋の前方に架けられている。これらのことから“梁系 Liang Xi” 関連の家屋が重要な位置を占めているといえる。

4-3. 年代による家屋分布

この集落では約150年前、即ち1800年代中頃の家屋21が最も古く、次に約100年前、1800年代末の家屋24が古い (Table 2-1, 以下 Table 2-1 参照)。1800年代建立の家屋はこの2棟 (7.7%)である。1950年代建立の家屋は3棟 (11.5%)、1960年代建立の家屋は8棟 (30.8%)、1970年代建立の家屋は1棟 (3.8%)、1980年代建立の家屋は12棟 (46.2%)である。

1800年代建立の家屋は集落の東側、かつ川寄りに立地している (Fig. 4-4, 以下 Fig. 4-4を参照)。1950年代建

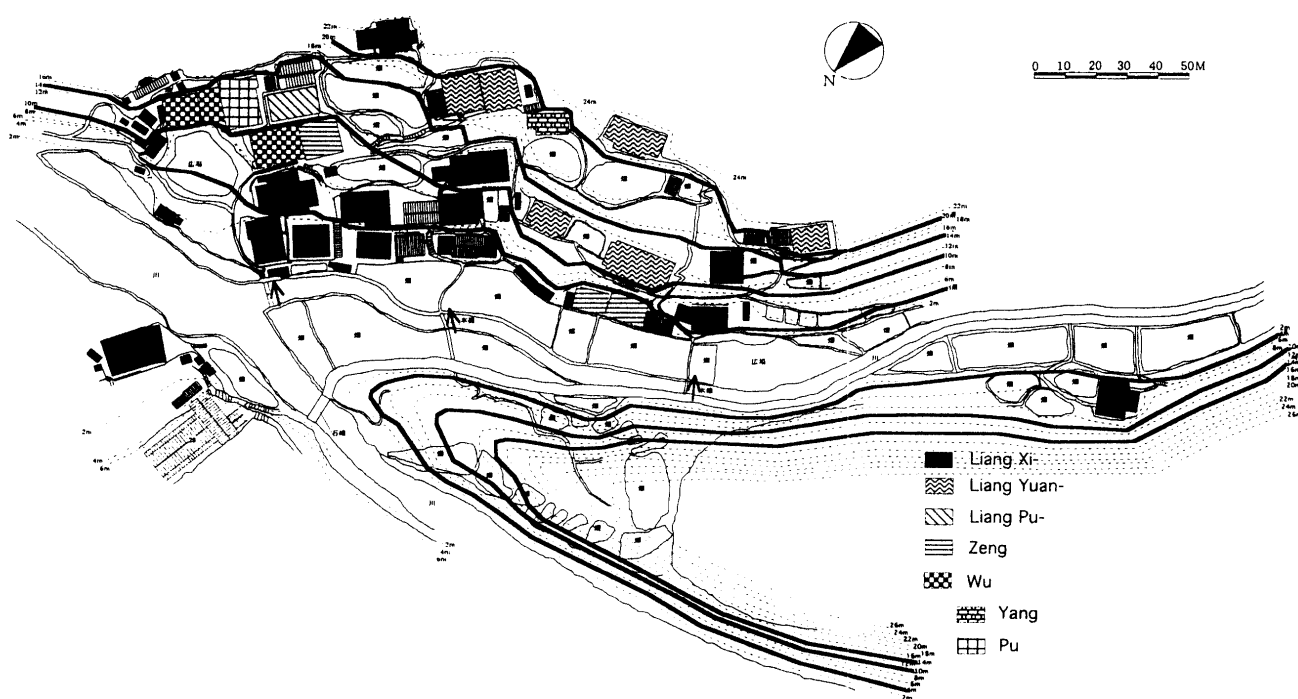


Fig. 4-3 Distribution of Name

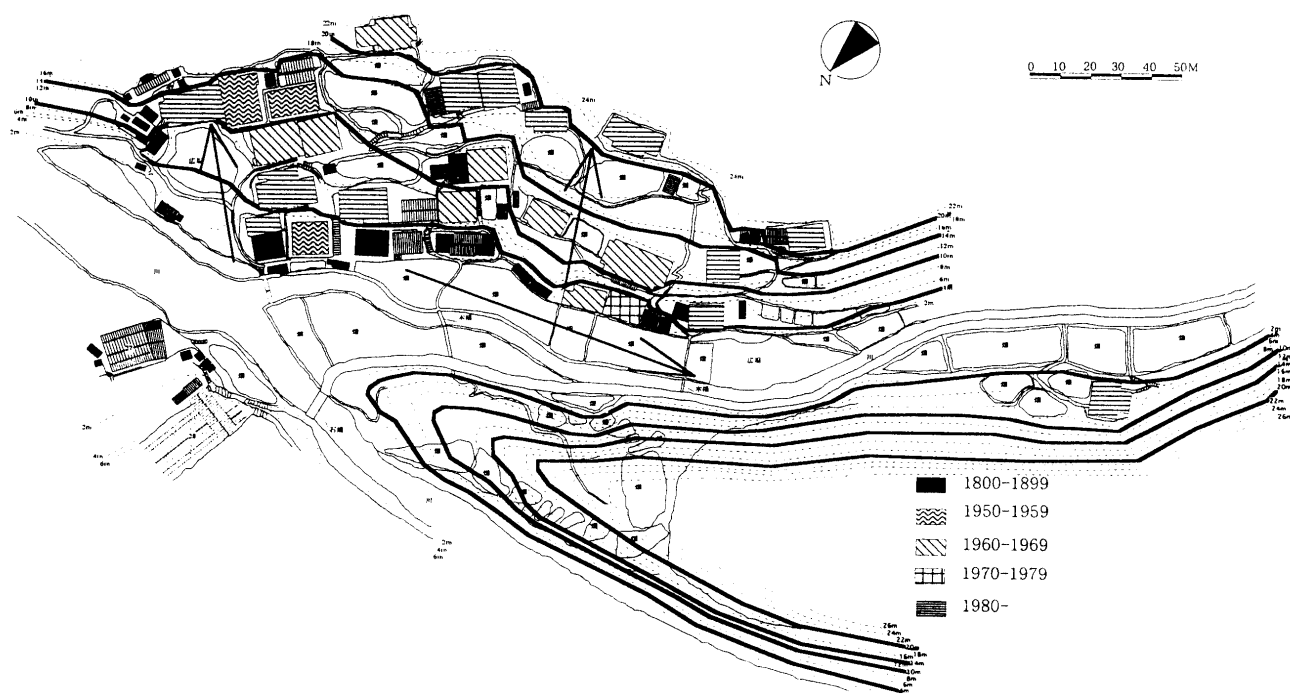


Fig. 4-4 Distribution of Year

立の家屋では、家屋21と家屋24に挟まれた場所、即ち集落の東側、かつ川寄りに立地している家屋と集落の東側、かつ集落斜面最上部分に立地している家屋がある。1960年代と1970年代建立の家屋は、1950年代建立の家屋15・18の前方から西側にいくにしたがって川寄りに立地する分布を示す。1980年代建立の家屋は、1800年代建立の家屋の後方辺りから西にいくにしたがって1960年代と1970年代建立の家屋群の後方に立地し、更に西にいくにしたがって川寄りから集落斜面最上部分に立地する分布を示している。

これらのことから、この集落はまず家屋21・24から斜面上方へ展開し、そこから西側へ、即ち川の下流から上流へ集落が展開しているといえる。また集落の西側でも斜面下方から上方へ展開しているといえる。

4-4. 集住について

家屋21・24は1800年代中頃の建立であり、家屋22は1800年代末の建立である。またこれら3棟は何れも“梁系 Liang Xi” 関連の家屋である。このことから、この集落では川と川が合流する手前の部分、つまり東側の川寄りの部分が重要であると考えられる。

集落の形態はこの重要部分を起点とし、斜面下方から上方へ、そして川の下流から上流へ等高線に添うように集住し、棟を等高線に沿って並べ、集住形態を展開している。

5. 結 び

湖南大学建築系との共同研究が5年経過した。5年間は一つの区切りであり、まとめに入る時期にきている。研究テーマ「湖南省民家の研究」を進め、最初の2年間は漢民族の民家にあて、次の3年間は少数民族の民家にあて、計画通り、毎年現地調査に出掛けて学生と共に実測調査をした。湖南大学では最初から実測調査に加わった柳肅助教授は鹿児島大学大学院博士後期課程に在籍して論文をまとめようとしている。戴菲助手は1年間特別聴講生として、平成8年8月から平成9年8月まで在籍し、現在調査結果をまとめて湖南大学に修士論文を提出しようとしている。唐堅と共に少数民族の民家を調査し、その結果を修士論文にまとめて湖南大学に提出した。私達の院生もそれぞれ研究テーマとして取り組んでいるものの、湖南省の民家は湖南大学建築系で研究を確立することが筋であると考えている。私達は日本の民家と比較し、更に日本の民家の研究に新たな視点を生み出したいと考えている。

今回の報告ではトン族の民家の間仕切が柱間に設ける方法と同時に柱のない壁と壁の間に設けていたことを明らかにし、そのことによって部屋数を多くしたことを指摘しえた。骨組については部屋の拡張の要求に応じて梁間を大きくした過程を説明しえた。この発展過程は他の少数民族には見られないことであった。最後は集住するにあたって、山を背にし、川を前面にして等高線上に並

ぶこと、またその起点となる位置を明確にしえた。その位置は丁度大きな川へ小さな川が注ぐ位置であった。この集住形態を今後深めることが大切な課題と考えている。

この研究は平成10年度科学研究費補助金（国際学術研究）課題番号10045049（研究代表者土田充義）による研究成果の一部である。

注 釈

- 注1 島尾拓也他4名「湖南省門前町とその町家に関する研究」日本建築学会研究報告九州支部第35号3, pp. 625-628 (1995年3月)
島尾拓也他4名「南岳の町家と張谷英村の住居（アジア文化圏の民家とその集住形態に関する研究4）」日本建築学会研究報告中国・九州支部第10号, pp. 773-776 (1996年3月)
島尾拓也他3名「中国湖南省の民家と南岳の街区構成に関する研究（アジア文化圏の民家とその集住形態に関する研究12）」日本建築学会研究報告九州支部第36号3, pp. 461-464 (1997年3月)
- 注2 比嘉健他4名「中国湖南省張谷英村の農村住居とその集住形態に関する研究（アジア文化圏の民家とその集住形態に関する研究3）」日本建築学会研究報告中国・九州支部第10号, pp. 769-772 (1996年3月)
比嘉健他3名「中国湖南省張谷英村の農民住居に関する研究（アジア文化圏の民家とその集住形態に関する研究6）」日本建築学会学術講演梗概集, pp. 539-540 (1996年9月)
晴永知之他3名「中国湖南省張谷英村における集住形態に関する研究（アジア文化圏の民家とその集住形態に関する研究7）」日本建築学会学術講演梗概集, pp. 541-542 (1996年9月)
島尾拓也他3名「中国湖南省張谷英村の農民住居に関する研究（アジア文化圏の民家とその集住形態に関する研究8）」日本建築学会学術講演梗概集, pp. 543-544 (1996年9月)
土田充義他2名「中国湖南省張谷英村の民家に関

する研究」鹿児島大学工学部研究報告第38号, pp. 231-240 (1996年9月)

比嘉健他2名「張谷英村の巷道と集住形態に関する研究（アジア文化圏の民家と集住形態に関する研究15）」日本建築学会学術講演梗概集, pp. 457-458 (1997年7月)

- 注3 福永尚敬他4名「中国湖南省土家族の住居と集住形態について（アジア文化圏の民家とその集住形態に関する研究8）」日本建築学会研究報告九州支部第36号3, pp. 457-460 (1997年3月)
土田充義他3名「中国湖南省土家族民家の研究」鹿児島大学工学部研究報告第40号 pp. 175-188 (1988年9月)
- 注4 柳肅他2名「中国湘西苗族民家における平面形式と構造形式の研究（アジア文化圏の民家と集住形態に関する研究14）」日本建築学会研究報告九州支部第37号3, pp. 497-500 (1998年3月)
- 注5 柳肅他3名「湖南省新晃トン族民家における囲炉裏の使い方から見た生活様式について（アジア文化圏の民家と集住形態に関する研究19）」日本建築学会研究報告九州支部第38号3, pp. 473-476 (1997年3月)
米森義辰他3名「湖南省新晃トン族とその周辺の少数民族の住居平面に関する研究（アジア文化圏の民家と集住形態に関する研究20）」日本建築学会研究報告九州支部第38号3, pp. 477-450 (1997年3月)
- 注6 貴州トン族住居調査委員会「特集：蘇堂—貴州トン族の村と生活 中国・貴州の高床住居と集落—その2」（『住宅特集4-1993』(株)建築史資料研究社, 平成5年4月, pp. 4-107)の「Ⅱ章 集落構造と社会 2. 家族と社会」（江口一久著）では“この同じ字を共有することは、強い絆で結びあわせていることを示すと考えてよいだろう。”と述べ、更に“姓はその人の出自、出身部落を示す。”と述べている。